

**A17c カリーナ星雲に付随するブライトリム天体の近赤外観測**

仲野 誠 (大分大・教育)、杉谷光司 (名市大)、他 IRSF/SIRIUS チーム

カリーナ星雲 NGC 3372 は我々の銀河内で知られている中で最も大質量の恒星  $\eta$  Car を含む多くの大質量星と多くの若い恒星の集団を伴う領域であり、大規模な星形成のプロセスを探るのに良い対象である。しかし、今までカリーナ星雲における星形成中の領域はリムに位置する IRAS 10430-5931 (Megeath et al. 1996) が知られているのみであった。

我々は南アフリカ天文台の IRSF に搭載された近赤外線 3 色同時サーベイ用カメラ SIRIUS により、カリーナ星雲領域に付随するブライトリム分子雲の近赤外測光観測を行った。観測対象として選んだのは Midcourse Space Experiment 衛星 (MSX) によってカリーナ星雲南部の dust pillar の頭部に検出されたコンパクトな中間赤外線天体 6 個 (Smith et al. 2000) と、カリーナ星雲の西縁部の直線状のリムに位置する IRAS 10414-5919 である。JHKs バンドによる観測は 2001 年 6 月に行われ、シーイングサイズは  $1.5 \sim 2''$  であった。各積分時間は 300–400 秒で限界等級は  $10\sigma$  平均的に  $J=17.8$ ,  $H=17.1$ ,  $K_s=16.4$  程度と見積もられた。MSX 天体はその位置からカリーナ星雲内の多くの大質量星との強い相互作用によって形成されたことを示唆しているが、その中に赤外超過を示す天体のクラスターを発見した。本ポスターではその詳細や他の天体の解析の結果も併せて報告する。